先導的大学改革推進委託事業
「教科専門と教科教育を架橋する教育研究領域の構成案」

# 「音楽科内容学」構成案

担当者
鳴門教育大学　西園　芳信（音楽科教育学）（チーフ）
鳴門教育大学　頃安　利秀（声楽）
兵庫教育大学　竹内　俊一（音楽科教育学）
上越教育大学　阿部亮太郎（作曲）

## 「音楽科内容学」構成案【要旨】

### 1．教員養成における音楽科に関する教科の専門性

音楽科に関する教科の専門性は，音楽を音楽として成立させている諸側面とその原理を理解し，それを実践的指導において扱えるようにすることである。そして，この専門性は，音楽を生成の原理によって表現し鑑賞する教育によって育成される。

### 2．育成すべき資質・能力

⑴　音楽科の教科内容構成を音楽の認識の観点から理解し，それを授業の目標に即して構成できる。
⑵　音楽科の教科内容と学力育成との関連が理解できる。
⑶　音楽科の教科内容を生成の原理によって児童・生徒が取り組めるように授業構成ができる。
⑷　音楽科の教科内容構成を学力育成の観点から理解し，その実現のための授業構成ができる。
⑸　音楽科の教科内容を教材によって具体化できる。
⑹　音楽科の教科内容構成を教材との関連で理解し，それを実践として展開できる。

### 3．教科内容の構成

芸術の認識論から導出した音楽科の教科内容は，次のようになる。

⑴　認識論的定義：「芸術は，言語や記号等による概念や論理的形式では捉えることのできない自然の質や内的経験としての人間感情やイメージを音・色彩・身体的動き・言葉等の媒介物によって感性的な形を与え，誰もが知覚できるように表現したものである。」この芸術の認識論から音楽科の教科内容を導出すると次のようになる。

⑵　音楽科の教科内容構成

①「かたち」：音楽の形式的側面（音楽の諸要素とその組織）
②「なかみ」：音楽の内容的側面（曲想・特質・雰囲気）
③「背景」：音楽の文化的側面（風土・文化・歴史）
④「技能」：音楽の技能的側面（声や楽器・合唱や合奏の技能，読譜の技能，批評の技能）

⑶　教育実践から捉えた音楽科の教科内容構成の体系

A／認識対象〈音楽〉①「かたち」：音楽の形式的側面，②「なかみ」：音楽の内容的側面，③「背景」：音楽の文化的側面，B／認識能力〈知覚・感受・理解〉，C／認識活動〈表現・鑑賞〉④「技能」：音楽の技能的側面。

### 4．期待される成果

現在，教員養成大学・学部における音楽科の教育内容は，音楽の伝統的専門分野となる実技（声楽・器楽・ソルフェージュ・指揮）と理論（歴史・音楽理論）の内容によって展開されている。このことは，小学校教員養成の教科専門の教育についても同様である。そのために，教員養成で修得する教育内容と学校の音楽科で扱う教科内容との間に乖離がある。

そこで，上記に示したような芸術の認識論から導出した音楽科の教科内容構成を音楽の生成の原理によって修得することで，学校での音楽科の教科内容を理解しそれらを子どもの成長と発達に則して扱え，指導できるようになる。また，このようにして音楽科の教科内容を指導することで，子ども達の学力育成に結びつく教科内容となる。

# 「音楽科内容学」構成案

## Ⅰ　教科内容学研究の視点と方法

**視点１　音楽科の教育研究の実情**－小学校教員免許取得に係る「教科に関する科目」（音楽科）の実態－

小学校教員免許取得に係る「教科に関する科目」として，音楽科に関しては「小学校音楽」「音楽Ⅰ」「初等音楽」「音楽基礎」等々の名称で授業が行われている。これらの科目の目的は，小学校における音楽科の指導に必要とされる基礎的な知識と技能を修得することである。内容としては，楽典の知識，ピアノ実技，歌唱実技，共通教材の弾き歌い技能等の修得が中心となる。大学によっては，このほかにソルフェージュや指揮法，またリコーダー演奏等も授業内容として扱うところもある。これらの授業科目の内容を，国立の教員養成をもつ大学の約１／３程度を取り上げ，それらのWEB上のシラバスから読み取れる範囲で比較・検討を行った。そして，音楽科の教科内容構成[1]の４つの柱，つまり①「かたち」音楽の形式的側面，②「なかみ」音楽の内容的側面，③「背景」音楽の文化的側面，④「技能」音楽の技能的側面（『教育実践から捉える教員養成のための教科内容学研究』，増井・西園他）の観点から分類してみた。

その結果，①「かたち」音楽の形式的側面と④「技能」音楽の技能的側面を中心に授業内容が構成されているところがほとんどで，②「なかみ」音楽の内容的側面や③「背景」音楽の文化的側面を授業内容に含めているところはわずかであった。以下，いくつかのシラバス例を参照しながら述べていく。

１）北海道教育大学（旭川）[2]

授業名：「初等音楽」

授業概要：小学校における音楽の授業に必要とされる，基礎的な知識と技能を身につけるために，楽典の講義，ピアノ実技，共通教材の弾き歌いを行います。

到達目標：

⑴　バイエル（ピアノ演奏）：正しい指使いで，楽譜に記載された通り正確でかつ，美しく演奏できているか。

⑵　弾き歌い：歌詞の内容を表現し，大きく，無理のない発声で歌い，また，正確に伴奏が付けられているか。

授業計画：

第１週　　ガイダンス。
第２週　　楽典基礎，ソルフェージュ，バイエル，コードネームについて。
第３週　　楽典基礎，ソルフェージュ，バイエル，「春の小川」の弾き歌い。
第４週　　楽典基礎，ソルフェージュ，バイエル，「ふるさと」の弾き歌い。
第５週　　楽典基礎，ソルフェージュ，バイエル，「こいのぼり」の弾き歌い。
第６週　　楽典基礎，ソルフェージュ，バイエル，「われは海の子」の弾き歌い。
第７週　　「春が来た」の弾き歌い。バイエル及びこれまでの共通歌唱教材の復習。
第８週　　「ふじ山」の弾き歌い。バイエル及びこれまでの共通歌唱教材の復習。
第９週　　「茶つみ」の弾き歌い。バイエル及びこれまでの共通歌唱教材の復習。
第10週　　「冬げしき」の弾き歌い。バイエル及びこれまでの共通歌唱教材の復習。
第11週　　「もみじ」の弾き歌い。バイエル及びこれまでの共通歌唱教材の復習。

---

[1] 西園芳信・増井三夫編著（2009）『教育実践から捉える教員養成のための教科内容学研究』，風間書房，pp.157-160

[2] http://www.hokkyodai.ac.jp/syllabus/

第12週　「まきばの朝」の弾き歌い。バイエル及びこれまでの共通歌唱教材の復習。
第13週　「おぼろ月夜」の弾き歌い。バイエル及びこれまでの共通歌唱教材の復習。
第14週　「さくら　さくら」の弾き歌い。バイエル及びこれまでの共通歌唱教材の復習。
第15週　実技試験のみ。

北海道教育大学（旭川）の場合は，到達目標にあるように，ピアノ演奏と弾き歌いの実技指導が授業内容の大半を占め，そのために必要な楽典に関する知識は，講義を通して教えられているようである。

2）山形大学（教育学部）[3]
授業名：「音楽の基礎」[小A]
授業概要：
・テーマ　音楽の基礎的知識と技能
・ねらい　音楽科で必要とされる基本的な知識について講義し，演習を通して基礎的な技能を修得する。そのために，ピアノ奏法と楽典事項の理解に重点を置く。
・目標：長音階と短音階の理解，音程について，主要三和音と属七和音の理解，譜表について，拍子・リズム・音の長さの理解，用語，記号について
到達目標：音楽科で必要とされる基本的な知識について，一定の水準を理解出来ているか。ピアノ伴奏に必要な技能を習得しているか。楽典（理論筆記）60点，ピアノ弾き歌い40点の合計
授業の方法：授業時間をほぼ2等分し，前半を全員のための講義とし，残りを2クラスに分けて，個人指導（時間と受講者の数と進度により柔軟に対応）する。
山形大学では，北海道教育大学よりも音楽の基礎的知識の修得に重点が置かれているが，やはり音楽の「かたち」と「技能」が中心で，このことは次の宮城教育大学でも同様にいえることである。

3）宮城教育大学[4]
授業名：「音楽」
授業概要：音楽に関わる基礎的な知識と技術を学ぶ。
到達目標：学期末には弾き歌いの試験，及び合唱の発表を実施します。
授業計画：授業は，ピアノ実技及び弾き歌い（ピアノで伴奏を弾きながら歌をうたうこと）の指導と，音楽の基礎理論の説明から構成されます。ピアノの実技については，1週間の練習成果の発表と，次回の課題の説明を中心に授業を進めます。学期末に，小学校の音楽教材を弾き歌いできるようになることが目標です。音楽の基礎理論については，楽譜の読み方や小学校の音楽の授業を担当するのに必要な基本的な項目を説明します。6月中旬～下旬に，音楽理論に関する試験を実施します。
他にも弘前大学[5]「小学校専門音楽Ⅰ」，福島大学[6]「子どもの音楽表現」，群馬大学[7]「初等科音楽」，横浜国大[8]「小教専音楽」，岐阜大学[9]「音楽Ⅰ」，広島大学[10]「初等音楽」，鳴門教育大学[11]「初等音楽Ⅰ」，鹿児島

[3] http://campus3.kj.yamagata-u.ac.jp/syllabus/2010/
[4] http://syllsrv.miyakyo-u.ac.jp/cgi-bin/SyllSearch/
[5] http://db.jm.hirosaki-u.ac.jp/cybouz/
[6] http://kyoumu.adb.fukushima-u.ac.jp/
[7] http://syllabus.jimu.gunma-u.ac.jp/customer/open/
[8] https://risyu.jmk.ynu.ac.jp/gakumu/Public/Syllabus/
[9] https://syllabus.gifu-u.ac.jp/syllopen/
[10] https:/momiji.hiroshima-u.ac.jp/syllabus/
[11] https:/lc-nue.naruto-u.ac.jp/syllabus2/

大学[12]「小学校音楽Ⅰ」などがこのタイプといえる。

同じように「技能」を中心とした授業を行っているが，教員採用試験に対処できる能力の育成を前面に出し，より丁寧に実技指導を行っているのは次の岩手大学である。ここでは実技科目として声楽とピアノを分けてそれぞれ１単位の授業にし，学生の声楽とピアノの実技能力をつけることにより多くの時間を使い，教育実習や教員採用試験に備えようとしている。

４）岩手大学[13]

授業名：「小学校音楽Ａ」（１単位）

授業概要：発声法の基礎として全身のリラックスから体操，発声練習を行い，小学校歌唱共通教材の階名唱，歌詞と楽譜を理解しての歌唱，その他の歌曲（斉唱，重唱，合唱）の歌唱，リズム・トレーニングと指揮法の基礎およびリズム・アンサンブル，音楽理論の基礎の講義・実習を行う。

到達目標：教育実習や教員採用試験に対処できる能力を身につける。学校現場での授業のために十分な実力をつける。

授業名：「小学校音楽Ｂ」（１単位）

授業概要：コードの授業とピアノ個人レッスンの２本立て。毎週共通教材１曲と以上の曲を準備し，授業中は教室のキーボードを使用して練習する。各々のレベルに合わせて進行していくが，ティーチング・アシスタント（音楽科大学院生）の指導も加わり，毎週徐々に難易度の高い曲の演奏が可能となるように指導していく。

到達目標：当授業では，小学校５・６年生程度の音楽教材の歌の「歌の弾き語り」ができるようになり教員採用試験合格レベルに達することを目標にしている。

千葉大学の「小学校音楽①②③」も，実技指導をピアノ・声楽・弾き歌いの３授業に分け，岩手大学と同様，教員採用試験を念頭に置いた授業が行われている。

上越教育大学では，同じく実技指導が中心ではあるが，小学校における音楽科の様々な教科内容に対応するためにリコーダーや指揮法，また日本の楽器にも授業内容を拡げて指導している。

５）上越教育大学[14]

授業名：「音楽」（通年）

授業概要：初等教育における音楽科の指導に必要とされる音楽的技能と知識を習得し，その過程において音楽的理解力を養う。ピアノは初心者向けや経験者向けなど，能力に応じた教材が用意されている。

授業内容：1 ガイダンス，ピアノ基礎奏法　2 楽典（楽譜の仕組み，音楽の用語などをこの回も含め３回に分けて学ぶ）　3 歌唱（歌うための基礎（発声等）を３回に分けて学ぶ）　4 リコーダー（リコーダー（縦笛）の吹き方（指使い等を含む）の基礎を３回に分けて学ぶ）　5 ピアノ（各自の水準にあった短い課題曲の練習と認定。初心者でも弾けるようになる。）　6 日本の音楽（講義形式で行う）　7 歌唱　8 リコーダー　9 ピアノ　10 歌唱　11 リコーダー　12 ピアノ　13 ピアノグレード試験（前記課題曲による試験）　14 選択合奏・合唱（合奏か合唱か選択し，実際に合奏，合唱を行う）　15 選択合奏・合唱　16 楽典　17 ピアノ　18 鑑賞　19 鑑賞　20 ピアノ　21 指揮法　22 ピアノ　23 楽典　24 楽器の話　25 ピアノ　26 ピアノグレード試験　27 音楽あそび　28 弾き歌い　29 筆記試験　30 筆記試験解説

---

[12] https://eduestw1.edu.kagoshima-u.ac.jp/ac_syllabus/

[13] http:/ia.iwate-u.ac.jp/i_index.htm

[14] http://www.juen.ac.jp/syllabus/

奈良教育大学「音楽」[15]では日本の伝統音楽やポピュラー音楽も授業内容に加えている。

授業内容によっては講義形式で行えるものもあるが，ピアノ実技や歌唱実技等の実技分野は，個人的な指導が不可欠なので，小学校教員免許の取得を目指す多くの学生に対処するため，各大学とも教科専門の教員がほとんど全員この授業を担当し，場合によっては非常勤講師をこれに加えるところもある。

この科目の到達目標には，ほとんどの大学で「弾き歌い」を第１にあげている。このことは，教員採用試験の多くにおいて，「弾き歌い」が実技試験として課されていることに因るものと思われる。

以上みてきたものは，音楽の「かたち」と「技能」が中心であったが，次の茨城大学の「初等音楽科内容研究」は，実技能力よりも教科の指導目標や教育内容に視点を置いた授業内容となっている。

６）茨城大学[16]

授業名：「初等音楽科内容研究（Ａ～Ｅ）」（２単位）

授業概要：小学校音楽科における教科の指導目標や各領域における教育内容を学び，それらの指導について必要な諸能力の習得を目指す。その追求にあたっては，常に音楽的感覚の啓培を基盤に置きながら，表現や鑑賞及び音楽理論について基礎的力量の高揚を図る。

到達目標：小学校音楽科の教育内容を学ぶとともに，それらの指導に必要な諸能力の習得を目指す。

授業計画：⑴授業ガイダンス。小学校音楽科の目標・領域・教育内容を精察する。⑵学習指導に必要な基礎的技能及び音楽理論等について習得する。

そのほか，大学によりこれらの授業を担当できる教科専門教員の数や専門分野に応じて，授業科目にバラエティを加えるところもあるが，多くの大学では課程認定基準ぎりぎりの教員数で対応しているため，大変苦労しているのが実状である。音楽専修の学生だけでなく，小学校教員を目指すすべての学生に対し，教員採用試験に合格することを目標に，ピアノと弾き歌いの実技能力をつけさせることは，講義形式による授業と異なり大変多くの時間と労力を費やさなければならない。そのため，どうしても教科内容構成の４つの柱のうち，②「なかみ」音楽の内容的側面，③「背景」音楽の文化的側面を授業内容に反映させることができないのが実態である。（頃安利秀）

### 視点２　芸術の認識論的定義

#### １）認識論的定義

芸術は，自然の質の世界を感性で捉えそれを誰もが知覚できるように表現する活動である。芸術は，自然の質の世界に動かされたわれわれの心のイメージや感情などの内的経験としての意味を直観という感性的能力で捉え，それを音・色彩・言葉・身体などの媒体を通して誰もが知覚できるように表現する活動である。そして，そのことによって，自然の質や内的経験を認識するのが芸術的認識である。自然の質や内的経験を知覚できるようにするには，そこには表現を成立させるための論理が求められる。音楽の場合は，音楽の諸要素とそれの組織化によって質的時間を表現することである。つまり，音楽は，音色・リズム・旋律・速度・強弱等音楽の諸要素を素材として繰り返しと対照，調和等の手法によって構成し組織化することによって，高揚と低下，前進と後退，加速度と減速度，急激な突進とおもむろな減速度といった質的時間を表現する。従って，芸術的認識は，認識の対象は主体（表現する自己の内的経験）と表現した作品（素材で組織化し客体として表すこと）の両方にあり，そして，それらの相互作用によって生み出される芸術美の基準は，主体と客体の合一にある。このような芸術的認識には，芸術の生成の原理が備わっているとみなされる。芸

[15] http://syllabus.nara-edu.ac.jpfmi/xsl/g-jikanwari/
[16] http://www.edu.ibaraki.ac.jp/syllabus/

術の生成の原理とは，次のような経験を指す。内部世界（内的経験）の意味を芸術表現の素材を組織化することで具体化し外部世界に表現を形造る，すなわち表現を生成し，そして，この過程で内部世界（内的経験）は意味が具体化されその内的経験が再構成される，すなわち経験が生成される。

以上から，芸術的認識については，次のように定義される。「芸術は，言語や記号等による概念や論理的形式では捉えることのできない自然の質や内的経験としての人間感情やイメージを音，色彩・身体的動き・言葉等の媒介物によって感性的な形を与え，誰もが知覚できるように表現したものである。」そして，このようなことから，芸術的認識の教育的価値は，自然の質の世界や内的経験を認識対象とし，それを音や色彩等を媒体としそれの組織化によって感性的に認識できるように表現するものと言うところにある[17]。

### ２）音楽科の教科内容構成の柱

この内的経験に形を与え，それを誰もが知覚できるように表現するには，音を媒介とする音楽は，次の４つの側面によって成立する。まず，内的経験としての感情やイメージを音楽の諸要素とその組織化によって表現を具体化する。この音楽の諸要素とその組織化によって音楽の「かたち」が創られ，これは音楽の形式的側面になる。このことによって内的経験としての感情やイメージ，すなわち「なかみ」に形が付与され，これは，音楽の内容的側面となる。そして，これらの「かたち」「なかみ」は，或る人間の思想や感性によって創造されるもので，そこにはその人間が育った環境としての風土・文化・歴史等の「背景」がある。これは，音楽の文化的側面となる。さらに，これらの「かたち」「なかみ」「背景」から成立している音楽を表現として具体化するには，声や楽器を操作するための「技能」が求められる。これは，音楽の技能的側面となる。以上から，芸術の認識論から捉えた音楽科の教科内容構成の柱は，次の４側面となる[18]。

①「かたち」音楽の形式的側面（音楽の諸要素とその組織）
②「なかみ」音楽の内容的側面（曲想・雰囲気・特質・イメージ・感情）
③「背景」音楽の文化的側面（風土・文化・歴史）
④「技能」音楽の技能的側面（声や楽器・合唱や合奏の技能，読譜の技能，批評の技能）

## 視点３　体系的構造と内容構成

### １）育成すべき教員像

⑴　音楽科の教科内容構成を音楽の認識の観点から理解し，それを授業の目標に即して構成できる。
⑵　音楽科の教科内容と学力育成との関連が理解できる。
⑶　音楽科の教科内容を生成の原理によって児童・生徒が取り組めるように授業構成ができる。
⑷　音楽科の教科内容構成を学力育成の観点から理解し，その実現のための授業構成ができる。
⑸　音楽科の教科内容を教材によって具体化できる。
⑹　音楽科の教科内容構成を教材との関連で理解し，それを実践として展開できる。

### ２）音楽科の体系

音楽科の教科内容構成について，児童・生徒の「音楽認識」の観点からその体系性を述べる。音楽科における表現と鑑賞における「音楽認識」について，図１によって示す。教育実践としての音楽科内容構成の体系性は，Ａ認識対象，Ｂ認識能力，Ｃ認識活動（方法）の構造の中で捉えることとなる。この「音楽認識」

---

[17] 芸術の認識論的定義は，拙稿「第１章　カリキュラム構成を支える哲学」（『生成を原理とする21世紀音楽カリキュラム』東京書籍，2006年）pp.12-16による。また，この内容は，拙稿「第６章　音楽科の教科内容構成の原理と枠組み」（西園芳信　増井三夫編著『教育実践から捉える教員養成のための教科内容学研究』風間書房，2009年）pp.158-159を再録している。
[18] 音楽科の教科内容構成の柱は，拙稿『小学校音楽科カリキュラム構成に関する教育実践学的研究－「芸術の知」の能力の育成を目的として－』風間書房，2005年による。また，この内容は，拙稿「第６章　音楽科の教科内容構成の原理と枠組み」（西園芳信　増井三夫編著『教育実践から捉える教員養成のための教科内容学研究』風間書房，2009年）pp.158-159を再録している。

の構造に上記の芸術認識から導出した音楽科教科内容を位置付けると次のように整理される[19]。

Ａ認識対象〈音楽〉
①「かたち」音楽の形式的側面（音楽の諸要素とその組織）
②「なかみ」音楽の内容的側面（曲想・雰囲気・特質・イメージ・感情）
③「背景」音楽の文化的側面（風土・文化・歴史）
Ｂ認識能力〈知覚・感受・理解〉
Ｃ認識活動（方法）〈表現・鑑賞〉
④「技能」音楽の技能的側面（声や楽器・合唱や合奏の技能，読譜の技能，批評の技能）

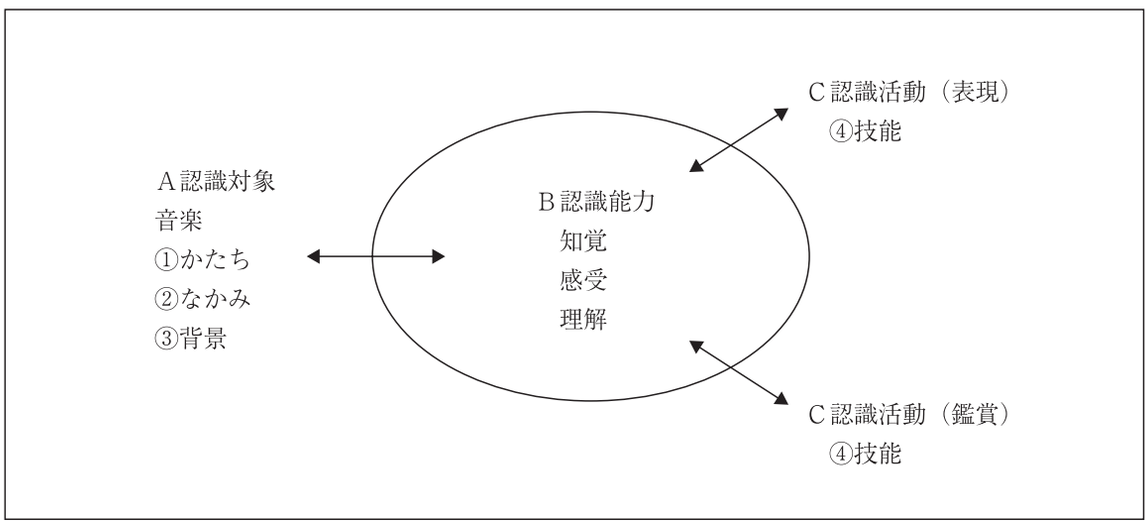


**図１．音楽の認識構造**

（西園芳信　増井三夫編著『教育実践から捉える教員養成のための教科内容学研究』風間書房，2009年，p.161.）

従って，教育実践から捉えた音楽科の教科内容構成は，これらのＡ認識対象，Ｂ認識能力，Ｃ認識活動（方法）（以下「Ｃ認識活動」）と記す。）の全体となる。このＡ認識対象，Ｂ認識能力，Ｃ認識活動の関連は，表現と鑑賞の行為を分けて捉えると次のようになる。表現としての演奏は，楽譜等と主体との相互作用によって，音楽のかたち（要素）の知覚，なかみ（曲想・特質等）の感受，背景（文化・歴史等）の理解から，表現内容を読み取り解釈し，具体的な音楽表現をイメージとして表象する。そして，それを技能（声や楽器）で具体的なものにする。鑑賞は，音楽と主体との相互作用によって，音楽のかたち（要素）の知覚，なかみ（曲想・特質等）の感受，背景（文化・歴史等）の理解から，表現内容を読みとり，それらを解釈し音楽をイメージとして表象する。そして，それを言葉など用い批評文にする。

我が国や諸外国の主要な音楽カリキュラムを「音楽認識」の構造に対応させ捉えると，時代と共に音楽科の教科内容構成の捉え方も認識活動としての音楽の技能的側面だけでなく，認識対象（形式的側面，内容的側面，文化的側面），そして，認識能力（知覚・感受・理解）をも含んで構成し，「音楽認識」の全体を教科内容とするというように変化している[20]。

これは，芸術としての音楽教科においても表現や鑑賞を楽しむだけでなく，学習を成立させ音楽科の特性

[19]「音楽科の体系」は，拙稿「第６章　音楽科の教科内容構成の原理と枠組み」（西園芳信　増井三夫編著『教育実践から捉える教員養成のための教科内容学研究』風間書房，2009年）pp.160-161からの引用である。
[20] フランス，中国，韓国，米国（教科書シルバー・バーデット・ミュージック），カナダ（ブリティッシュ・コロンビア州の音楽カリキュラム）の学校カリキュラムの分析による。詳しくは，拙稿「第６章　音楽科の教科内容構成の原理と枠組み」（西園芳信　増井三夫編著『教育実践から捉える教員養成のための教科内容学研究』風間書房，2009年）pp.162-163を参照。

に即して子どもの学力育成に寄与すること，つまり，音楽科の教育実践としての成立を期待するようになったことの現れと言えよう。

これまでは，学校教育や教員養成の専門教育においても，音楽の理論的側面と実践的側面を分離して教育してきた。つまり，上記の「音楽認識」の構造で示した認識対象と認識活動を切り離して捉え指導してきた。認識対象となる音楽の形式的側面，内容的側面は，音楽理論（楽典，和声学，学式論，音楽史，音楽美学）として，認識活動の技能的側面は，音楽表現技法や演奏法として，理論と実践を分けて教育してきた。教育実践から捉えた音楽科の教科内容は，Ｂ音楽認識（知覚・感受・理解）を仲介にしてＡ認識対象とＣ認識活動とを一体で捉え，教育することとなる。つまり，音楽の理論知と実践知を一体に扱うということである。

音楽科教科内容の体系によって，小学校から教員養成までを通した音楽科の内容構成を，下記の表１のように一貫した形で示すことができる。

表１　小学校から教員養成までの音楽科内容の体系

| 音楽科の体系 | 小学校 | 中学校 | 高校 | 教員育成 |
|---|---|---|---|---|
| ①音楽の形式的側面<br>（音楽の諸要素とその組織） | ①音楽の形式的側面 | ①音楽の形式的側面 | ①音楽の形式的側面 | ①音楽の形式的側面 |
| ②音楽の内容的側面<br>（音楽の曲想・特質・雰囲気・イメージ・感情） | ②音楽の内容的側面 | ②音楽の内容的側面 | ②音楽の内容的側面 | ②音楽の内容的側面 |
| ③音楽の文化的側面<br>（音楽の風土・文化・歴史） | | ③音楽の文化的側面 | ③音楽の文化的側面 | ③音楽の文化的側面 |
| ④音楽の技能的側面<br>（声や楽器の表現技能，合唱・合奏の表現技能，読譜の技能，鑑賞における批評の技能） | ④音楽の技能的側面 | ④音楽の技能的側面 | ④音楽の技能的側面 | ④音楽の技能的側面 |

### 視点４　学習指導要領の教科内容構成

#### １）小学校

平成10年度の小学校学習指導要領は，視点３の２）音楽科の体系からみると認識対象の音楽の形式的側面と内容的側面，認識活動の音楽の技能的側面から教科内容が構成され，認識対象の音楽の文化的側面と認識能力としての知覚・感受・理解の内容がない。

平成20年告示の小学校の表現と鑑賞の教科内容の構成は，認識対象の音楽の形式的側面（「要素」），内容的側面（「面白さ，美しさ」），認識能力（「感じ取る」），それに認識活動の音楽の技能的側面（例：「自然で無理のない声で歌うこと」）が内容にあり，認識対象の音楽の文化的側面が内容にない。小学校においては，音楽の文化的側面については，直接的には指導内容となっていないが，指導の実践の場では音楽理解の必要から文化的側面についても部分的に指導として扱っている。このような教育の実態から小学校においても音楽の文化的側面を指導内容にすることが妥当な考えと言えよう[21]。

#### ２）中学校

平成10年度の中学校学習指導要領は，音楽科の体系からみると認識対象の音楽の形式的側面，内容的側面，文化的側面，認識活動の音楽の技能的側面から教科内容が構成され，認識能力としての知覚・感受・理解の

[21] 平成20年告示小学校学習指導要領音楽科では，表現と鑑賞の指導内容の他に上記に示す音楽の形式的側面と内容的側面とからなる共通事項が指導内容となり，この共通事項を支えとして表現と鑑賞の指導事項を指導するようになった。

内容構成がない。

平成20年告示中学校の表現と鑑賞の教科内容構成は，音楽科の体系からみると「音楽認識」の構造の全てが教科内容として構成されている。すなわち，認識対象は，音楽の形式的側面（「要素や要素同士の関連」），内容的側面（「特質，雰囲気」），文化的側面（「背景となる文化，歴史等」）が，認識能力は，知覚・感受・理解が，認識活動では，音楽の技能的側面（例：「表現を工夫して歌う，言葉で説明」）が構成されている。我が国の平成20年告示中学校学習指導要領では，音楽科の教科内容構成が体系的に示されている[22]。

## Ⅱ　教科内容の開発

### 小学校教員養成の場合

#### 視点１　目標

１）音楽科の教科内容構成を音楽の認識の観点から理解し，それを授業の目標に即して構成できる。
２）音楽科の教科内容を生成の原理によって児童が取り組めるように授業構成ができる。
３）音楽科の教科内容構成を学力育成の観点から理解し，その実現のための授業構成ができる。
４）音楽科の教科内容構成を教材との関連で理解し，それを実践として展開できる。

#### 視点２　内容構成の視点

音楽の教科内容，すなわち，音楽の形式的側面，内容的側面，文化的側面，技能的側面を，音楽の活動（歌唱・器楽・創作・鑑賞）を通して認識し，音楽科の学力（諸要素の知覚，特質の感受，背景の理解，楽器や声の技能，批評文の技能）を育成する。

#### 視点３　教材分析

１）表現：「わらべうた」を教材にし，これの声や楽器の表現を通して，視点２で示した内容構成を指導する。例えば，わらべうた，おちゃらか，あめこんこん，前の門さん，いちもんめのいーすけさん等を教材として取り上げ，これを①旋律を斉唱で歌う，②強弱を変化させて歌う，③旋律をずらして歌う，④旋律にオスティナートを付けて歌う等して，音楽を外的世界に生成することで，音楽の形式的側面，内容的側面，文化的側面，技能的側面を学習する。
２）鑑賞：小学校で扱う教材，たとえば「ノルウェー舞曲」第２番（グリーク作曲）を教材にし，これの鑑賞活動によって視点２で示した内容構成を扱う。

「ノルウェー舞曲」第２番は，ノルウェーの作曲家グリークGrieg，Edvard（1843－1907）によって，1881年に作曲されたものである。ノルウェーの民族的な旋律を素材にした音楽で，元来は，ピアノ二重奏に書かれたが，現在では管弦楽に編曲された形のものがよく知られている。

この音楽は，ＡＢＡの明確な三部形式の曲で，最初のＡは，オーボエによる優雅な主旋律で，次の中間部のＢは，管弦楽器の合奏で激しい民族的なダンスの動きを感じさせる部分で，最後のＡは，最初のＡのオーボエによる優雅な主旋律が繰りかえされる。

この音楽を小学校の低学年の教材として取り上げると，次のような教科内容が指導として想定される。まず，最初にこの音楽を聴き，最も印象にのこるところは，中間部Ｂの「はげしい」ところである。このところを起点に，では，最初のＡの部分と最後のＡの部分は，曲想・特質・雰囲気を視点にして聴取すると，「おだやか」と感じ取る。次に，ではなぜＢの部分は「はげしい」と感受し，Ａの部分は「おだやか」と感

[22] 平成20年告示中学校学習指導要領音楽科では，小学校と同様，表現と鑑賞の指導内容の他に上記に示す音楽の形式的側面と内容的側面とからなる共通事項が指導内容となり，この共通事項を支えとして表現と鑑賞の指導事項を指導するようになった。

じるのか，音楽の形式的側面にその根拠を求め，聴取する。すると，音楽の形式的側面の速度については，Ａの部分は「遅い」，Ｂの部分は「速い」，最後のＡの部分は「遅い」と知覚する。このようにして，強弱と音色についても聴取すると，下記の表２のような知覚となる。このような音楽の内容的側面の感受を基にし，その感受の根拠を求め音楽の形式的側面の学習をすると，この音楽はＡＢＡの三部形式の構成になっていることを理解する。

そして，最後にこのような音楽の内容的側面の感受と音楽の形式的側面の知覚を基に，この音楽の特徴を人に紹介するために批評文を書かせると，下記のような音楽批評文ができる。

表２　音楽の形式的側面の知覚と内容的側面の感受

| 音楽の形式的側面 | | | | 音楽の内容的側面 |
|---|---|---|---|---|
| 形式 | 速　度 | 強　弱 | 音　色 | 曲想・特質・雰囲気 |
| A | 速い・(遅い) | 強い・(弱い) | オーボエ | はげしい・(おだやか) |
| B | (速い)・遅い | (強い)・弱い | 管弦楽器 | (はげしい)・おだやか |
| A | 速い・(遅い) | 強い・(弱い) | オーボエ | はげしい・(おだやか) |

批評文

「はじめはおだやかで，やさしい感じの音色で，テンポがいいけど，急に音が大きくなって，速度が速くなる。そして，最後にまたはじめのおだやかでやさしい感じの音色になる。その変化が楽しい。」

## Ⅲ　シラバス例

小学校[23]

１．授業科目：「音楽Ⅰ」

２．目的：歌唱，器楽，創作，鑑賞の活動を通して，音楽科の教科内容の諸側面とその関連性を理解し，それらを子どもの指導において扱えるような能力を育成することを目的とする。

３．指導内容

①かたち：音楽の形式的側面（音楽の諸要素と仕組み）の知覚

②なかみ：音楽の内容的側面（曲想・特質・雰囲気）の感受

③背景：音楽の文化的側面（背景となる風土・文化・歴史）の理解

④技能：音楽の技能的側面（読譜・歌唱・器楽・合唱・合奏の技能，批評技能）

４．目標

①歌唱や器楽の表現活動を通して，音楽の諸要素と特質を知覚・感受し，音楽が諸側面とその関連性で組織されていることを理解すると共に，楽器や歌唱表現の基礎的技能を身に付ける。

②鑑賞活動を通して，音楽の諸要素と特質を知覚・感受し，音楽が諸側面とその関連性で組織されていることを理解すると共に，批評文にする技能を身に付ける。

③わらべうた音階や楽器の特性を活かした創作活動を通して，音楽の諸要素と特質を知覚・感受し，音楽が諸側面とその関連性で組織されていることを理解すると共に，創作表現の技能を身に付ける。

５．授業計画（15回）

①わらべうたを教材とした歌唱活動を通して，音楽のかたち，なかみ，背景を理解し，歌唱・輪唱・合唱の表現（技能）ができるようにする。（２回）

②小学校の歌唱や器楽の教材を通して，かたち，なかみ，背景を理解し，歌唱・器楽・合唱・合奏（技

[23] シラバスは，西園芳信　増井三夫編著『教育実践から捉える教員養成のための教科内容学研究』風間書房，2009年，pp.178-179を再録。

能）が表現できるようにする。（３回）

③わらべうた音階を活かした旋律創作を通して，音楽のかたち，なかみ，技能，背景を理解し，わらべうた音階を活かした旋律が作れる（技能）ようにする。（２回）

④わらべうた音階で作った旋律に木琴・打楽器・鍵盤楽器等で伴奏を付けることを通して，音楽のかたち，なかみ，背景を理解し，わらべうた音階を活かした合奏曲が作れる（技能）ようにするとともに，楽器表現の技能を身に付ける。（５回）

⑤小学校の教材による鑑賞活動を通して，音楽のかたち，なかみ，技能，背景を理解すると共に，鑑賞によって批評文が作れる（技能）ようにする。（３回）

６．教材：小学校教科書教材の他，適宜コピーしたものを用いる。

７．授業形態：目的に応じ，グループによる授業を取り入れる。

８．評価：評価の観点・評価方法・評価基準

①評価の観点：上記４に示した目標が評価の観点となる。

②評価方法と基準：アセスメント・テスト，学習ノート，レポートの記述内容等を総合的に判断し，ＳＡＢＣの基準で評価する。（西園芳信）

試行実践

音楽科の試行実践授業は，平成23年６月２日に，鳴門教育大学芸術系コースの学部生27名を対象に行われた。授業の内容は，歌唱や鑑賞の活動を通して，音楽科の教科内容の４側面（形式的側面，内容的側面，技能的側面，文化的側面）を理解し，そのことを子どもの指導において扱えるようになることである。授業者は，頃安利秀（歌唱）と西園芳信（鑑賞）である。

１．試行実践授業（歌唱）

まず受講生全員で，わらべうた「あんたがたどこさ」を，楽譜を見ないで一緒に歌い，さらに何人かの受講生に歌に合わせて毬つきをしてもらった。そうすることで，受講生はこのわらべうたの特徴を耳とからだで感じ取ることができるようになる。また数人の学生に，歌に合わせて指揮をしてもらった。すると単純な２拍子であると思っていたこのわらべうたが，意外にも複合拍子になっていることに気付くことができ，この歌がどのような形式になっているかに興味を持つようになる。その後でこのわらべうたの楽譜（採譜したもの）を受講生に示し，先ほど体験したわらべうたの中にある音の動きや拍子，リズム，さらには繰り返し記号等についても，楽譜ではどのように書き表わされているかを理解できるようにした。（音楽の形式的側面）

次にわらべうた「通りゃんせ」を一緒に歌い，その後でこの歌詞の内容について質問した。ほとんどの受講生が，このわらべうたがどういう内容のことを歌ったものであるのかほとんど知らなかった。しかし一緒に歌詞を読んでいくと，このわらべうたが対話形式になっており，昔の関所のようなところで行われている問答のようになっており，登場人物は子どもを連れた母親らしき人と，関所の番人のような人であることが理解できた。大まかな状況がわかったので，何人かの受講生で配役をきめて歌い，さらに簡単な演技をつけながら歌ってもらうことにした。そうすることによりこのわらべうたの内容について理解を深めることができ，さらに簡単なオペラの成立についても理解することができた。（音楽の内容的側面，形式的側面）

遊びとしてのわらべうたを歌うことから始めることで，子どもたちは音楽に親しみを感じる。次に表現としての歌唱へとつなげていくために，歌うための発声について学習した。まず発声のために不可欠な呼吸のことについて，人間の感情表現である泣く・笑う・怒る・驚くときの呼吸と関連付け，さらに生理学的な面から呼吸時のからだの働きについて，図を使って腹式呼吸が理解できるようにした。そして実際に呼吸の練習や発声練習を行った。（音楽の技能的側面）

またこの中で，文化の違いによる発声の違いについても触れ，邦楽や西洋音楽にはそれぞれに相応しい声

や音があることを説明し，また実際にそういった声の出し方やその時の響の違いについても受講生自らが声を出しながら理解していった。（音楽の文化的側面）

最後に，「かえるの合唱」を歌いながら音階と移動ド唱法について理解し，さらに輪唱することによって単旋律から簡単なポリフォニー合唱になり，その中に生れてくるハーモニーを感受し，西洋音楽としての和声を理解することができた。（音楽の形式的側面，技能的側面，文化的側面）（頃安利秀）

２．試行実践授業（鑑賞）

導入　最初に小学校学習指導要領音楽から次の［共通事項］を紹介し，鑑賞の指導においても表現と同様に［共通事項］を関連させながら指導することを説明した。

［共通事項］（第３学年及び第４学年）ア　音楽を形づくっている要素のうち次の(ア)及び(イ)を聴き取り，それらの働きが生み出すよさや面白さ，美しさを感じ取ること。(ア)音色，リズム，速度，旋律，強弱，音の重なり，音階や調，拍の流れやフレーズなど音楽を特徴付けている要素　(イ)反復，問いと答え，変化などの音楽の仕組み　イ　音符，休符，記号や音楽にかかわる用語について，音楽活動を通して理解すること。

そして，本日の鑑賞の授業の目標は，鑑賞の活動を通して，上記［共通事項］の下線のところを中心に学習することで音楽科の教科内容構成について理解することであることを伝えた。

実践１「行進」（カバレフスキー作曲「道化師」から）を教材にし，音楽の形式的側面として，反復や異なるフレーズを知覚し，音楽の内容的側面として，穏やかところと怖いところを感受することを目標とし実践した。音楽を鑑賞しながら指導者が音楽の流れに即して，次のような図形を黒板に示した。そして，この音楽は，----のところと，∧∨∧∨∧∨のところが，これらは音楽の形式的側面としては，旋律の反復と変化に，また，異なるフレーズの繰り返しになり，音楽の内容的側面としては，----のところは穏やかな感じで，∧∨∧∨∧∨のところは怖い感じになると整理した。また，小学校の低中学年の子どもは前者については道化師が上手に綱渡りをしているところで，後者は風が吹いて道化師が転けそうになったところと感じ取ることを紹介した。

実践２「ノルウェー舞曲」第２番（グリーク作曲）を教材にし，音楽の形式的側面として，速度，強弱，音色，形式を知覚し，音楽の内容的側面として，「はげしい」，「おだやか」について感受することを目標とし実践した。実践は，教材研究で示したように，次の順序で行った。

最初にこの音楽を聴き，最も印象にのこるところで学生に手を挙げさせた。学生は，中間部Ｂのところで手を挙げた。そして，この中間部はどんな感じがするかを言葉で答えさせた。すると「はげしい」とか「活動的」という言葉がでてきた。このことを黒板に板書し，次に何故「はげしい」とか「活動的」と感じるのか，音楽の形式的側面に注目させ，再度音楽を聴取した。同時に下記の表３の「学習ノート」を学生に配布し，音楽の形式的側面の速度，強弱，音色について聴取し，ノートに記述させた。結果は，速度については，Ａの部分は「遅い」，Ｂの部分は「速い」，最後のＡの部分は「遅い」と答えた。強弱については，Ａの部分は「弱い」，Ｂの部分は「強い」，最後のＡの部分は「弱い」と答えた。音色については，Ａの部分は「オーボエ」，Ｂの部分は「管弦楽器の合奏」，最後のＡの部分は「オーボエ」と答えた。

以上の学習を経て，音楽の内容的側面の「はげしい」「おだやか」の感受内容は，音楽の形式的側面の速度，強弱，音色等の音楽の諸要素とそれらの組織化によってもたらされていることを説明した。そして，このような音楽の内容的側面の感受を基にし，その感受の根拠を求め音楽の形式的側面の学習をすると，この音楽はＡＢＡの三部形式の構成になっていることも理解できることを説明した。

最後にこのような音楽の内容的側面の感受と音楽の形式的側面の知覚を基に，この音楽の特徴を人に紹介するために批評文を書かせ，２人の学生に発表させた。（西園芳信）

表３　鑑賞の「学習ノート」

学習ノート（鑑賞）　　年　　氏名

| 曲名 | 「ノルウェー舞曲」 | | | | 作曲者 | 作曲 |
|---|---|---|---|---|---|---|
| | B／音楽の諸要素 | | | A／曲想・雰囲気・イージ，曲の感じ（～のような感じ） | どうしてそのように感じたのか<br>A／曲想とB／音楽の諸要素との関連 | |
| 形式 | 速度 | 強弱 | 音色（楽器名） | | | |
| | 速い<br>遅い | 強い<br>弱い | | おだやか<br>はげしい<br>自分の言葉で | 個<br>グ | |
| | 速い<br>遅い | 強い<br>弱い | | おだやか<br>はげしい<br>自分の言葉で | 個<br>グ | |
| | 速い<br>遅い | 強い<br>弱い | | おだやか<br>はげしい<br>自分の言葉で | 個<br>グ | |

批評文（この音楽の全体の特徴を友達に伝えるために曲想と音楽の諸要素とを関連づけて文章にしよう。）

今日の授業は，　・楽しかった，　・どちらとも言えない　・楽しくなかった
曲想の変化が，　・わかった　・どちらとも言えない　・わかりにくかった
諸要素と曲想とを関連づけて　・考えられた・どちらとも言えない・考えにくかった
授業後の感想

中学校[24]

1．授業科目：「声楽」

2．目的：歌唱表現活動を通して，音楽科の教科内容の諸側面とその関連性を理解し，それを子どもの歌唱指導に生かせる能力を育成することを目的とする。

3．指導内容：

①かたち：音楽の形式的側面（音楽の諸要素の関連）

②なかみ：音楽の内容的側面（歌詞の内容・気分・曲想）

③背景：音楽の文化的側面（様々な歌唱を生み出す風土・文化）

④技能：音楽の技能的側面（自然で無理のない声でうたう・曲種による発声）

4．目標：

①音楽の素材となる声が人間のからだや感情表現と結びついていることを理解する。

②発声の技能を支えるものとしての呼吸のしくみや，そのあり方を学ぶ。

③曲想を感じ取り，その曲にふさわしい表現ができるように，声の響きや歌唱技法，フレージング等を習得する。

④曲種による発声の違いがその文化的背景と関連していることを理解する。

5．授業計画（15回）：項目によっては複数回必要とする

①わらべ歌や唱歌等を歌いながら，自然で無理のない声で歌うことについて考える。

②声の原動力としての呼吸のしくみや，声を出すときの正しい姿勢のあり方を理解できるようになる。

③表現力のある声を生み出すための重要な要素である深い呼吸（横隔膜式呼吸）を理解し習得する。

④歌唱のための練習曲（コンコーネ等）を使って，音楽の要素を知覚し，息の流れの上に声を乗せ，響きのある声でフレーズが歌えるようになる。

⑤歌唱教材（イタリア歌曲等）を使って，音楽の要素を知覚し，息の流れの上に声を乗せ，響きのある声でフレーズが歌えるようになる。

⑥歌唱教材（イタリア歌曲等）を使って，詩の内容や旋律の構成から曲想を感じ取り，フレーズの組み立てや歌い方を考えながら歌えるようになる。

⑦歌詞の朗読を行い，歌における言葉の表現を考え，歌唱に生かせるようになる。

⑧様々な歌を聴き，曲種に応じた発声の違いに気付き，その違いの成因（文化的背景）を理解する。

⑨様々な歌唱教材を用いて，歌唱表現を考える。

⑩学習した曲を演奏する。

6．教材：小・中学校の教科書にある歌唱教材から精選する以外に，日本，イタリア，ドイツ等の歌曲を用いる。

7．授業形態：10人程度のグループによる授業で行う。

8．評価：評価の観点・評価方法・評価基準

①評価の観点：上記4に示した目標が評価の観点となる。

②評価方法と基準：歌唱演奏により，声を思い通りに使った歌唱表現ができているかどうか，またレポートにより歌うことの意味を理解しているかどうかを判断し，ＳＡＢＣの基準で評価する。（頃安利秀）

[24] シラバスは，西園芳信　増井三夫編著『教育実践から捉える教員養成のための教科内容学研究』風間書房　2009年，pp.181-182を再録。

## 参考文献一覧


西園芳信　増井三夫編著『教育実践から捉える教員養成のための教科内容学研究』，風間書房，2009年。

http://www.hokkyodai.ac.jp/syllabus/

http://campus3.kj.yamagata-u.ac.jp/syllabus/2010/

http://syllsrv.miyakyo-u.ac.jp/cgi-bin/SyllSearch/

http://db.jm.hirosaki-u.ac.jp/cybouz/

http://kyoumu.adb.fukushima-u.ac.jp/

http://syllabus.jimu.gunma-u.ac.jp/customer/open/

https://risyu.jmk.ynu.ac.jp/gakumu/Public/Syllabus/

https://syllabus.gifu-u.ac.jp/syllopen/

https://momiji.hiroshima-u.ac.jp/syllabus/

https://lc-nue.naruto-u.ac.jp/syllabus2/

https://eduestw1.edu.kagoshima-u.ac.jp/ac_syllabus/

http://ia.iwate-u.ac.jp/i_index.htm

http://www.juen.ac.jp/syllabus/

http://syllabus.nara-edu.ac.jp/fmi/xsl/g-jikanwari/

http://www.edu.ibaraki.ac.jp/syllabus/

西園芳信「第１章　カリキュラム構成を支える哲学」日本学校音楽教育実践学会編『生成を原理とする21世紀音楽カリキュラム』東京書籍，2006年。

西園芳信『小学校音楽科カリキュラム構成に関する教育実践学的研究－「芸術の知」の能力の育成を目的として－』風間書房，2005年。

文部科学省『小学校学習指導要』1998年。

文部科学省『中学校学習指導要』1998年。

文部省『小学校学習指導要領解説音楽編』2008年。

文部省『中学校学習指導要領解説音楽編』2008年。

西園芳信・増井三夫「教員養成のための教科内容学（教科専門）研究の視点と方法」『日本教育大学協会年報第28集』2010年。

研究代表者　増井三夫『教員養成における「教科内容学」研究』『平成22年度日本教育大学協会特別研究助成研究報告書』（平成22年度日本教育大学協会特別研究助成研究）2011年。